

Alert 反天皇制運動 57号

号

[通巻 439 号]

2021 年
3 月 2 日発行

第 57 期・反天皇制運動連絡会

本紙最終号を迎え、天皇制というやつは一体全体この社会にとって何なのだろうと、あらためて思うのだった。それは支配者の側の、ではなく、多くの人々にとって。

反天皇制の運動の、そこはかなめなのだとも思うが、運動の立論の多くは、支配の側にある天皇（制）分析であったように思う。反天連はそれらを明らかにし、伝えていくことで、社会悪としての天皇制を暴き出してもきた。そのことによって、多くの人々にとっての天皇・天皇制も見えてくるはずでもあった。だけど、天皇制反対の声は 30 年前よりも大きくなっているかといえば逆だ。心穏やかではないまに最終号だ。

天皇も天皇制も、微妙に、あるいはドラスティックに進化しながら、この社会を下から上から押さえ込んでいる。この社会体制を「支えている」のだ。しかし、この社会の生き難さや理不尽さへの反発は、天皇や天皇制へとは向かわない。まったくうまくできたシステムだ。

手足を縛られる者に見えるのは、目の前の小さな権力者だ。苦境を強いられれば強いられるほど、その小さな権力者だけが見えてくる。その上にいる少し大きな権力者、ましてやそのトップにある者との繋がりを手繰り寄せるのは難しい。小さな権力者が君臨する、家や学校、職場や組織、地域。人がそれぞれに生きる現場と、その小さな社会を動かすシステム、そしてそのシステムを操る力をもつ者たち。そこにはたくさんの天皇制との接点があるのだが、なんとも見えづらい。

それでも私たちは、書物から小さなリーフレットから、あるいは文京区民センター等の公共施設や公園、街頭や飲み屋、はたまた芝居小屋や音楽シーン等々で、そういった接点を共有してもきた。そのなかに本紙も加わっていたなら嬉しい。「伝える」にはさまざまな形がある。運動にも。諦めず生きていきたい。みなさまもお元気で。そしてこれからも、ともに。

(桜井大子)

今月の Alert ●反天皇制の闘いは持続します！ 4/28 の連続行動に参加を！ ＊2

反天ジャーナル ●—— たけもりまき・忘れられし猫、でした・北 ＊3

状況批評 ●「代替わり」による象徴天皇制の再定義—— 天野恵一 ＊4

ネットワーク ●馬毛島基地建設のための環境アセス即刻中止、南西諸島の軍拡をここから止めよう！—— 和田香穂里 ＊7

太田昌国のみたび夢は夜ひらく（129）

●「お召列車」列車爆破計画から、ほぼ半世紀の歳月が流れ……—— 太田昌国 ＊8

野次馬日誌 ＊9 集会の真相 ＊11 学習会報告 ＊13 反天日誌 ＊13 集会情報 ＊14



250 円

●定期購読をお願いします（送料共年間 4 0 0 0 円）
●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/> mail: hanten@ten-no.net
●以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>

今月の

Alert

反天皇制の闘いは持続します！ 4 / 28 — 29 の連続行動に参加を



私として私たちが反天皇制運動連絡会として活動を開始した八〇年代は、経済の好況を背景に、この日本社会の全般が『ジャパン・アズ・ナンバーワン』であるかのような夜郎自大の国家意識が、かなり広く覆っていたはずだ。しかし、その時代にイメーシされ志向されていたはずの公平も公正も、ミレニアム以後の「クール・ジャパン」どころと同様に、いまさらながらではあるが、崩壊の一途をたどっていった。

これと同時に、八〇年代にはすでに裕仁の老化と衰弱が誰の目にも明瞭でもあり、しかも天皇の戦争責任の存在を隠蔽できないことによる歴史問題が、これに先立つ七〇年代には訪米や訪欧に対するさまざまな抗議行動や、沖縄「ひめゆりの塔事件」などの形で現れており、国家の戦争責任、戦後責任の問題もはつきりと浮上していたわけだ。

その時期には、メディアによる天皇や皇族のイメーシのウォッシングとして、「ロイヤルファミリー」を「マイホーム」意識に重ねる意識操作がしばしば登場し、天皇による戦争の扱われ方もまた、戦記物より「聖断神話」「大元帥」より「大帝」を印象づけるものが増えていた。そのなかで、中曽根により「戦後政治の総決算」が標榜され、政治経済の大きな再編が進められるとともに、広い意味での裕仁「Xデー」が開始されたのだった。極右政治家によって謳いあげられる戦後「総決算」と、戦後天皇制の再構築の接合は、これを嚆矢としてその後も繰り返されることになる。

なる。

その状況下で、反天皇制運動連絡会は、「この連絡会は、天皇制と闘う各戦線の担い手、その他多くの戦線で天皇制問題に理論的・実践的関心を抱いてきた人々、これまで天皇制批判の活動を理論的・思想的に担ってきた知識人等を幅広く結集し、運動面において、個別の闘いと全体の陣形の結合を媒介する機能を果たすと共に、天皇制を軸とした国家統合・地域統合の攻勢に対する緻密な情勢分析を行い、また理論的・思想的深化をはかることを目的として」いるとして立ち上げられた。奇しくも「一九八四年」の三月一日に創刊準備号を発行し、裕仁の死と明仁の「即位」による「代替わり」を経た一九九一年二月一日に第八三号を発行して、第一期は閉じられている。

それからは、だいたい三年に一度で活動の期を閉じるということとし、以後は、「反天皇制運動SPIRITS」（一九九一年四月〜一九九四年三月）、「反天皇制運動NOISE」（一九九四年五月〜一九九七年五月）、「反天皇制運動ジャーナル」（一九九七年七月〜二〇〇〇年八月）、「反天皇制運動PUNCH!」（二〇〇〇年一月〜二〇〇三年一月）、「反天皇制運動DANCE!」（二〇〇三年一月〜二〇〇六年二月）、「反天皇制運動あにまる」（二〇〇六年二月〜二〇〇九年二月）、「反天皇制運動モンスター」（二〇一〇年一月〜二〇一三年三月）、「反天皇制運動カーニバル」（二〇一三年三月〜二〇一六年四月）、「反天皇制運動Aie

rt」（二〇一六年六月〜）と続けて、今号では通巻四三九号となる。機関紙発行だけでなく、これにかつて発行した機関誌『季刊運動（経験）』や、運動の折々に発行したニュース、報告集その他の刊行物なども多く、個人的には時期により活動歴の濃淡があるのだが、全体的にはそこそこ生産的であったはずだ。

天皇制国家のレンズを通すと、「戦争は平和である／自由は隷属である／無知は力である」という、呪われたオーウェルの「ニュースピーク」が伝わってくる。神道は宗教ではなく、天皇制は「権力」ではなく「権威」そして「国民の総意」である、天皇は「慈愛」で「国民を統合」する、「生まれによる差別」はなく、経済格差は「多様性」であり、ヘイトや暴力は「民族の癒し」である……。これらに抵抗し、私たちは、このかんの活動を通じて、「反天皇制」という課題と、さまざまな闘いや理論的実践的課題とを突き合わせ、新たな視野を拓く努力を持続してきた。そして多くの人がとつながらる理路を模索してきた。予告してきたように、反天皇制運動連絡会は、裕仁の代替わり、明仁の代替わりを闘ってきて、この一〇期をもつて閉じ、解散する。とはいえ、私たちのそれぞれが分け持つものは、これからもつながりつつ革まっていくなことになる。反天皇制運動連絡会の活動の、その期ごとの課題に向けた「結束」としてではなく、内外から「ハンテンレン」と呼ばれてきた何ものも含め、積極的な価値が、よりはつきりと現れるよう力を尽くしたい。（編蝸）

愛すべき私の紙切れ

情報化社会とか監視社会とかいわれて久しく、パソコン・ネット環境なしでは生活できない日常を受け入れてしまっている自分にも気付く。何をもってフエイクと名指すのかわからないほど情報は錯綜し過剰な今だからこそ、この「反天皇制運動」通信の意義は大きい、大きかったというべきか。この際なので自分のことを書かせていただければ、私自身このような反天運動にかかわることになって云十年、あらゆる活動の紙媒体発行にエネルギーを割いてきたつもり。だからこそ本通信は愛すべき紙媒体通信の筆頭、しかもずっと「B版」で正しいよね。

何を伝えるべきかというテーマや内容が重要であることは言うまでもないが、それも発行までの日々の活動や思考の蓄積でしかない。原稿依頼、編集、校正、印刷、帳合、発送作業と流れるような一連のことを、難なくこなしてきたかのように見える本通信が、発行し続けてこなければ発禁処分がまかりとおるような時代になっていたかも!? その名はアラート。本通信が発行され続けた時間とともに生きてきた私は、戦後一番自由に高々と「天皇いらない」を叫んだ時代を「生きた」のか。あるときは人気のない山奥で、またあるときはデモ隊の数倍の警察に囲まれながら……。多謝。

(たけもりまき)

『失敗の本質』には

素があるから炙りだせ

かつての「スペイン風邪」の発生源がアメリカ陸軍だと聞けば、ダルトン・トランボが原作を書き、およそ30年後に自ら映画化した「ジョニーは戦場へ行った」(一九七一年/アメリカ)を思い出してしまふ。第一次大戦のヨーロッパ遠征軍に参加したジョニーを、軍医たちは意識も失った実験対象として扱うが、やがて女性看護師との「コミュニケーション」から、意思を持って生きている事がわかる。しかし軍医たちにとってそれはあつてはならない現実であり、彼は再び暗黒の中に、死を選ぶことさえできない孤独な生命として残されていく。人の生き死にからは真逆に思える医療と戦争が、ひとたび並び立つた時の残酷さがすさまじい。

二〇一一年の原発事故後につづき、昨年も国会で怒りを込めて発言した児玉龍彦は、新型コロナ感染状況の変化に対応せず、都合に合わせて右往左往する政府を指して、「日本の『失敗の本質』を、今回もきれいにしている」と言う(一月二十九日/TBSラジオ)。もちろん今回の「失敗」は国外の戦争の事ではないが、その「本質」をたどれば、侵略と植民地支配の歴史からまったく切斷されてはいないってことが。

(忘れられし猫、でした)

右派の勝訴に焦る産経

二月二十四日、最高裁大法廷(大谷直人裁判長)は、那覇市が市有地を「久米至聖廟」(孔子廟)のために無償提供していることが争われた住民訴訟の上告審判決で、無償提供は政教分離違反であると判断した。孔子廟で行われる「釋奠祭禮」(せきてんさいれい)なる儀式は宗教的意義を持つという主張を認めた。この訴訟の原告の目的が、「翁長市政(当時)を糺す」ことであり、翁長氏が「中国共産党と密接な関係にある」と決めつけ、打撃を与えるためのものであったことは知られている。しかも原告代理人は、首相の靖国神社参拝違憲訴訟などにおいて「靖国応援団」も務めていた徳永信一だ。

だが、儀式的な宗教性と市の関わりに着目して「信教の自由の保障の確保」という制度の根本目的との関係で相当とされる限度を超える」とした違憲判決は、本来右派にとって必ずしも喜ばしいものではない。だから、産経新聞などは「違憲」が独り歩きしては困る。今回の判決を盾に、社寺の伝統行事などにまで目くじらを立てるような「政教分離」の過熱化は避けたい」と懸念を示している。

ところで、大谷裁判長は最高裁長官として、国土地の中に一九徳田の国費をかけて建てた「大嘗宮」で行われた、天皇が神になる宗教儀式に参列しているわけだが、これはどう説明できるんですかね？

(北)

状況批評

思想・状況批評

「代替わり」による象徴天皇制の再定義

天野恵一

二月三日に、私たちは象徴天皇制としては二回目の「代替わり」儀式との闘いの運動的総括作業の第一回目の集まりを持った（主催「紀元節」と「天皇誕生日奉祝」に反対する2・11―23連続行動）。

この日は新天皇の誕生日であり、マスコミには「誕生会見」の天皇の言葉が、こぞって流されていた。状況的にマスコミが注目していたのは秋篠宮の長女眞子が、延期され続けている小室圭との結婚問題にどういう発言をするかであった。天皇は、結婚をいそいでいる眞子を支持していると解釈できる眞子発言があったからである。記者サイドから、その点についての事実確認をせまる質問が事前に準備されていないわけはなかった。

これには「国民」の意見が分裂しているのだから「両親」と話しあい、秋篠宮（父）がいう通り「多くの人の納得」が必要と、まったく眞子発言とは反対の内容のコメント。やっぱり天皇も反対派というトーンの記事が女性週刊誌などの皇室情報として大量に生産されるだろうことを予測させる内容であった。

この日の三人の問題提起者の一人であった私のテーマは、「代替わり」儀式と憲法——代替わり過程の総括——であったから、これをめぐる問題を具体的に論ずることについてはパス。全体のテーマが「天皇代替わり」とは何であったのか——再定義された象徴天皇制——であることをふまえて、「代替わり」によって、象徴天皇制が、どのように再定義されたのかという問題を、もっぱら憲法問題の土俵で話した。ただ、短時間の問題提起、長時間の会場からの質問をふまえての討論という組み立ての集会。短い提起の後、あれこれと討論の中で、話しきれなかった点を補足しながら話したため、まとまって整理して論ずることができずに、いろいろな点が舌足らずで終わってしまった。ここで、少し、そこで話した問題、その結論を、あらためてキチンと整理するかたちで論じておきたい。

1 「再定義」の内実と方法

その内実は、かつて護憲論者がよく語ったような、大日本帝国憲法下の神権（現人神）天皇制の復活（反動化）ではなく、タテマエとしては禁止されている象徴（人間）天皇制の政治性・宗教性を実質的に強める方向への「公的行爲」の拡大（とそれの法的正当化）である。この方向での再定義は、戦後憲法（一九四六年一月三日公布・一九四七年五月三日施行）のスタートの時点（占領下）から日本の政治権力者（保守）によって開始されていたものであり、厳密に憲法を解釈すれば、違憲というしかない、許されない（憲法上禁止されている）行爲の積みあがりの拡大という方法である（最初は天皇の国会開会の時の「お言葉」問題であった）。

象徴天皇二代目アキヒト天皇は、戦跡（戦死者追悼）・被災地「巡行」を中心に飛躍的に「公的行爲」を拡大した。今度のアキヒト天皇の「生前退位」はその「象徴としてのお務めについての天皇陛下のおことば」と名づけられた「ビデオ・メッセージ」の中で、「天皇が象徴であると共に、国民統合の象徴としての役割」であると位置付けた「天皇の象徴的行爲」というやつが、それである。次の象徴もその活動を積極的に担うべきであると（老人化した自分では、もつ担いきれないから「生前退位」を希望する）というメッセージだ。自分の自覚的違憲行爲の正当化と、その次代以降の天皇の継承への呼びかけである。

このアキヒト天皇自身の「象徴的行爲」の拡大は、着実にこの間、積みあげられてきた。この積みあがりの《方法》は、戦前（中）からの日本の政治的伝統にそくしたものである。

かつて戸坂潤は、日本が侵略支配した「満洲帝国」の承認を国際連盟内外の諸外国に対してせまった時の論理は、満洲帝国が事実として存在しているのだから、凡その理屈はこの事実の前に屈服すべきだというものであった。

帝国はどのような原因で、どのような力によってつくりだされていったかなどは一切不問で、すでに存在しているのだから、その事実を認めようとする強弁する、既成の事実の裏にしか論拠を認めない「事実の哲学」が支配する論理であると批判した。「事実の前には一切の理屈は全く無力なのだ」というわけである（『社会思想と風俗』一八九三四年）。

この既成事実への屈服を強いる「事実の哲学」は、戦後の象徴天皇制国家の支配の原理としても貫徹されている。アキヒト天皇のいう「象徴的行為」・保守政権の言葉に置きなせば「国事行為」以外の「公的行為」の拡大は、天皇が実行してしまっている「事実」を前提に、その正当化（合憲であるとするための形式的屁理屈）のロジックづくりによって進められてきた。天皇の「私的行為」も「公的性格」を持つものと「純粹私的」とを区別し、前者には「公的行為」と同様に「宮廷費」を支払うというスタイルも、つくりだされてきた。このカテゴリーでストレートな神々の継承儀式である「大嘗祭」も事実上国家の「公的行為」として実施されたのである。「事実の哲学」の支配のためには「伝統」として実行されているのだから、というロジックがささる便利に活用されている。天皇家の「伝統」とはそのまま「事実」による支配の「伝統」（人々の屈服）でしかないのだ。

さて、二月三日の新天皇の発言には、こういうくだりがあった。

「国民を思い、国民に寄り添う点で、災害で被災された方々、障害者や高齢者、あるいは社会や人々のために尽くしてこられている人々にも心を寄せ、ねぎらい、励ましていくことはとても大切なことです。それは、私と雅子二人の自然な気持ちであるとともに、皇室としての大事な務めであると思います」（傍線引用者）。

これは、「象徴的行為」（国家的「公的行為」）の拡大へ向けた継承の、既成事実への屈服を強いる実行の、あらためての宣言である。

そして、それは「代替わり」の儀礼の実行による象徴天皇制の再定義のある完成の天皇自身による確認の言葉でもあったといえよう。

2 宮内庁の「事務通牒」のみに基づく「神の国」儀礼の「復活」公然化

東京五輪・パラリンピック組織委員長森喜朗の公然たる女性差別発言での辞任のあまりにグロテスクなドタバタ劇。発言直後は続投を表明、ひらきなおりの「謝罪」のポーズ。反省ナシの公然の記者会見が火に油をそそぎ、

米国NBCという巨額の放映権料を支払うスポンサーなどの強い抗議も飛び出し、IOCの態度も急変。ついに辞任に追い込まれた（二月二日）。それでも森は引責辞任なのに自分の息のかかった次の新会長を密室で指名、指名された男（川淵）がペラペラとはしゃいでマスコミに話してしまい、菅政権も認めるわけにはいかず、会長の顔は「女性」でおさめる政治で、森を「父親」とした橋本聖子五輪相を、森の強い説得で、次の会長へ。

このドタバタの茶番劇はコロナ下で強行されようとしているオリンピックはその終わりが始まっていることを、端的に発言しているのではない。オリンピック批判は、このテーマではない。問題は森発言である。このイカレタ騒ぎが始まった時、私がすぐに想起したのは森の首相時代の「神の国」発言である。

二〇〇〇年五月一日の「日本の国、まさに天皇を中心としている神の国である」ということを国民の皆さんにしっかりと承知していただく」という発言だ。

この時代、この「神の国日本」という首相発言は、「国民主権」の民主主義の無理解な首相の言葉として、ほぼすべてのマスコミは強く非難してみせた。しかし、今回の神の一族である天皇の代々（万世一系）の神とのつながりを確認する「代替わり」の皇室神道を中心に置く儀礼が国家的公事としてあらためて公然と実行された事実。政教分離の原則との整合性への多少の疑問提示はゼロではなかったものの、この儀礼をほほまると全マスコミは、日本の美しき「伝統」の発露としてひたすら賛美し続けた。

とすれば、日本は「神の国」だと宣伝していることにならないのか。

森と違って安倍―菅政権そしてマスコミは二枚舌なのである。政教分離（二〇条）をかかげた憲法下では、それは公言してはいけないことになっているだけなのである。伝統（即成事実）は黙って実行するものなのだ。

前回同様、今回の「代替わり」の儀礼も大日本帝国憲法と皇室典範（の一部）とともに、消滅したはずの「皇室令」に基づいて実施されている。「皇室令及附属令廃止の件、皇室令一二号（一九四七年五月一日）によって旧皇室令はまるごと廃止されたはずである。戦後憲法の精神にそぐわないゆえに廃止された「皇室令」がどうして再生できたのか。宮内庁は一九四七年五月二日に、「従前の規定が廃止となり、新しい規定ができないものは従前の例に準じて事務を処理すること」という長官官房文書課長の「依命通牒」を出して

いる。この実務処理のための一つの「通牒」を口実に、憲法違反の「登極令」がまるごと復活し、これまた、憲法破壊の神道儀礼が国家の儀礼として公然とあたりまえのごとく実施されたのである（「昭和」から「平成」の「代替わり」ですでに一回、実行されているという既成事実をデ）に、今回は大々的に公然と正当化されつつ実施されたのである（批判の声は、あらかたマスコミからはシャットアウトされ、議会内を含む大きな反対勢力であった日本共産党も、その系列の学者・知識人も、こぞって沈黙するどころかほぼまるごと賛美肯定派へと「転向」してしまった）。

昨年の一・月八日に行われた秋篠宮の「立皇嗣の礼」も、あまりの神がかり規定ゆえ削除され消滅したはずの「皇室典範」一六条をよみがえらせるかたちで（今度の「生前退位」のための「特例法」の規定にそって）、実施されたという事実も、あわせて、考えてみるべきである。

3 象徴天皇制の「再定義」（解釈改憲）のある完成

「天皇の公務の負担軽減等に関する有識者会議」の座長代理を務め、今回の生前退位（代替わり）のオピニオン・リーダーとして動き続けた御厨貴が『天皇退位何が論じられたか——おことばから大賞祭まで』（中央公論新社）という編著本を二〇二〇年三月に早々と刊行している。それは多方面の多様な発言を広く集め、他人の論文に倣そうなコメントをつけた、今度の「代替わり」の権力サイドの総括本というべき書物である。

ほとんどが象徴天皇（制）翼賛論文（批判や疑問提示の論文はゼロではない）である。ここに集められた文章群をまとめて読んでみると、今度の「代替わり」プロセスでは、天皇（制）と人権・平和・デモクラシー原則との間の矛盾を敵対的なベクトルで考えていくという戦後の護憲解釈学の中に流れていた積極的な思想（学説）がほぼ消滅させられているという事実が見えてくる。〈人権・民主主義・平和〉原則と象徴天皇制は、全面的に調和的であるという理解・解釈の全面化がそこにあるのだ。

天皇自身によるビデオ・メッセージでの、象徴天皇制の憲法が禁止している内容への、天皇自身による規定の公言（内容以前に、その行為自体が禁止されている）、それはまた天皇自身による皇室典範改正の発議であり、マスコミの煽動をあてこんだ「民意」の承認づくりという、あまりに露骨な天皇の政治行為であった。

この天皇自身による、公然とした〈民主・人権・平和〉原則への破壊行為に対して、正面から公然と批判する憲法学者はゼロ。この事が示すのは、天皇自身がしかけた象徴天皇制の「再定義」（象徴天皇ゆえの〈公務〉フリーハンド化であり、天皇・皇室制度自身にかかわる問題についての天皇の〈政治的意思表示〉の解禁、「象徴的行為」の拡大（「私的」と分類されてきた天皇の行為の公然たる「公的行為」へのくりこみ）、「国事行為」への限定のしびりの崩壊、皇室神道を水面下にとじこめる解釈的しびりの全面的弱体化。こうした方向での象徴天皇制の〈解釈改憲〉のある完成。これが今度の「代替わり」によってつくりだされてしまった（既成事実の積みあがのゴールとして実現されてしまったことだ。これが「再定義」の内実である）。

おそらく「女性（女系）天皇も可能となる方向への象徴天皇制の再編を、「再定義」の最終ゴールとして予定している政治支配者たちは、今、少なくともと思う。「生前退位」の後は「女性（系）天皇制問題」が政治焦点として浮上してくる可能性は大である（天皇という絶対身分権威によって男女平等は拡大するという手品のようなイデオロギーの再浮上）。そして「再定義」をめぐる攻防はまだ続くだろう。

御厨貴は「平成の幕引きとともに、戦後という時代がようやく『本当』に終わったと実感している」とどこかで語っている。

実は「終わり」に向かっているのは、戦後の支配体制の立憲秩序による安定的支配の方ではないのか。メチャクチャな〈解釈改憲〉は法治秩序感覚を内部からガタガタにしまっている。今や日本の政治社会に安定的法秩序は育つ条件はなくなってきた。象徴天皇制「デモクラシー」の外面的安定は、内実の底なしの腐敗（二枚舌の詭弁）によって支えられているものにすぎない。私たちは、今回の「代替わり」の反天皇制運動の渦中でも、変容しつつ延命した〈大日本帝国〉と対決し続ける〈戦後〉が、圧倒的少数派である私たちの運動の中にはまちがいなく息づいているという実感を持ち続けることができた（戦争責任・戦後責任問題も終わりがいい）。

〈欺瞞と詭弁そして無責任の体系〉象徴天皇制への終わりのなき批判を！

馬毛島基地建設のための環境アセス即刻中止、南西諸島の軍拡をここから止めよう！

和田香穂里（前西之表市議会議員・馬毛島への米軍施設に反対する市民・団体連絡会会員）

馬毛島は種子島のすぐ目の前にある。周囲は「宝の島」の名にふさわしい豊かな漁場であり、かつては五〇〇人を超える人々が暮らしていた。

馬毛島に自衛隊基地を整備して米軍空母艦載機離着陸訓練（FCLP）を移転させることが二〇一一年のツープラスツー文書に明記されて一〇年目、この間の経緯や数々の問題点を列挙する紙幅は無いので、筆者が出演したYouTube「DEMO-RESE Radio（デモリサレジオ）」『今、無人島・馬毛島が熱う!! part1』〜4』『風雲急を告げる！馬毛島の今』をご覧いただきたい。また、雑誌「世界」二月号三月号で、馬毛島を取り上げているので、こちらも是非一読の上、馬毛島が単なる無人島でも絶海の孤島でもないことや、馬毛島に何が作られようとしているのか、その概要と背景を知っていただきたいが、以下簡単に触れる。

自衛隊馬毛島基地（仮称）は、戦後初めて国が新たな土地を取得して整備する自衛隊基地であり、その規模も機能も国内有数になるとされる。二本の滑走路と軍港を備え、陸・海・空自衛隊が年間を通して各種の訓練（示された資料では二二種類）を行うと同時に、米軍FCLPの恒久的な施設として使われる。米軍FCLP（年間二〇日程度）では二〇〇〜三〇〇〇回のタッチアンドゴーが深夜三時まで繰り返し、自衛隊の戦闘機

訓練が年間一三〇日、加えてV-22オスプレイなどの訓練も行くとされている。自衛隊と米軍が共同使用する一大訓練拠点となるのである。

もう一つの機能が整備補給・事前集積・展開拠点つまりこれまでにない大規模な兵站拠点である。住民への説明では「大規模災害時等」と災害対処を前面に出しているが、中国の動きを封じる米軍の戦略下での「抑止力・対処力の強化」を強調する。

馬毛島基地化に対して、地元では長く「反対派」が大勢を占めてきた。二〇一一年前後には、当時の長野力市長の「反対」の姿勢を柱に、署名活動も活発に行われた。また二〇一七年の市長選・市議選では、投票数のおよそ七割を反対派候補が獲得し、市長は「馬毛島軍事施設絶対」を掲げた八板俊輔氏が当選、市議会でも一一対五と反対派議員が多数を占めた。しかし八板市長は当選後「ニュートラル」「情報を得る時」（賛否は）しかるべきときがきたら明らかにする」などと反対の姿勢を後退させた。そこを狙ったかのように防衛省は、一六〇億円で馬毛島を買収、住民説明会、海上ボーリング調査と一気に基地化に向けて動いた。昨年一〇月に八板市長は「失うものが大きい」として基地計画に同意できない旨を国や県に伝えたが、遅きに失した感否めない。

市民の中にも「賛成派」「誘致派」の動きが大

きくなり、今年一月三十一日の市長選では、基地関係の交付金による地元の活性化を訴える市商工会長・福井氏と現職八板市長の一騎打ちとなった。福井陣営は農協・漁協・建設業界など経済団体の役員ら地元有力者のみならず、自民党県議、その向こうには森山裕国対委員長が、ヒト・モノ・カネをふんだんに使った選挙戦を展開した。「こんな選挙は今まで無かった」と市民が口々に言う選挙の結果は、一四四票差で現職八板氏が辛くも二期目の当選を果たした。同日の市議選では反対七賛成六中立一という結果で（筆者は一票の次点で落選、中立一は早くも「容認」を表明し、何を血迷ったか反対派が議長に選出、議決数で賛成派が多数を取るという厳しい展開となっている）。

選挙後八板市長は①設計等に係る入札の撤回②海上ボーリング調査の中止③環境アセスメントを実施しないことを防衛大臣に要請した。これに対し「賛成派も半数近くいる」と賛成派が抗議。防衛省は要請を無視して既にアセスの第一段階である「方法書の縦覧」を開始した。

反対運動は正念場である。一歩も引けない。この崖っぷちの馬毛島の状況と併せて南の島々の現状に注目し、全国から馬毛島基地化阻止・南西諸島軍拡阻止の声を挙げていただきたい。まずは環境アセス即刻中止を！

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく 129



「お召列車」列車爆破計画から、ほぼ半世紀の歳月が流れ……

去る二月某日、六一歳の誕生日を迎えた天皇の記者会見の記事に目を通して、やるべきことを見出し得ない人間存在の「虚しさ」と「はかなさ」を読み取った。自然災害の被災者、障碍者、高齢者に「寄り添う」ための現地訪問も新型コロナウイルスの蔓延によって長いこと中止せざるを得ず、代わってオンラインによる〈慰問〉を考案するも、実現した場合もあったが、新たな地震が起ったために傍迷惑なその行為も止めざるを得ず、ほかにやることも思いつかないので、困惑しているさまが、言葉のはしほしに露呈している。オンラインでの活動は「同時に複数の場所にいる人びとに会うことや、中山間地域など通常では訪問が難しい場所でも」訪れることができるので、「新たな可能性を見いだせた」と語ってはいるものの、その存在感の希薄さは覆い難い。ふと、それに比すれば、彼の祖父・裕仁には、(肯定的に言うのではないことは無論だが)為したことを含めて「存在感」があったと今さらのように思い、ついでに、一九七四年八月一四日の「未発」の出来事も思い出した。

もう半世紀ほど前の話になる。当時の天皇・皇后は、八月一五日の「全国戦没者追悼式典」に参加するために、前日の一四日には、静養先的那須の別荘から

東京へ戻るのを常としていた。そのころ形成されつつあった「東アジア反日武装戦線」狼部隊のメンバーは、一〇年間ほどの「お召列車」のダイヤを調べ、荒川鉄橋を通過する時刻を推定して時限爆弾を仕掛けることにした。その時の思いを、「連続企業爆破」容疑で一斉逮捕から四カ月後の一九七五年九月、一メンバーが書き記している。「アジア人民の歴史的な憎悪と怨念は、私たち日本国人民に、まず天皇裕仁をこそ死刑執行せよ、と要求している」と題するその文章は、彼らが「虹作戦」と称した天皇暗殺計画立案の過程と挫折に至る経緯を詳しく語っている(東アジア反日武装戦線KF部隊(準)著『反日革命宣言』新版、風塵社、二〇一九年、に収録)。

この企図を半世紀後の視点で捉え返したら、どう考えるか——その作業を主體的に担うべきひとはいない。ある人は獄死し、またあるひとは世界のどこかにいるだろうが、ここには不在である。でも、逮捕後ほぼ半世紀になる過程では、彼ら／彼女ら自身の手で一定の総括作業が積み重ねられてきた。そこから推測すると、たとえ天皇裕仁に対してではあっても「死刑執行せよ」という言葉は使わないだろう。死刑囚となつた彼ら自身が、確信を持って「死刑廃止」の立場に与

したからだ。そこでは、「人間の可変性」を想定できない例外的存在を設けるわけにはいかない。また、「そこにある悪を撃て! 悪に加担している自らの加害性を撃て! やるかやらないか、それだけが問題だ」とする、政治性を欠いた倫理的な突き付けによる軍事的な作戦も採用しないだろう。その拙速な論理は、数多くの死傷者を生み出した三菱重工ビル前爆破事件のように、社会の構造的な変革に繋がるどころか、それを阻害するものにほかならないからだ。

それにしても、半世紀という歳月は何か新たなものを生み出す長さでもある。韓国から『狼をさがして』という記録映画が届く。韓国語原題は『東アジア反日武装戦線』という。日本でも自主上映された『ノガタ(十五)』や『外泊』のキム・ミレ監督が、長い年月をかけて、「反日」に属していた、刑期を終えたメンバーや周辺の家族、「批判的」救援者取材して七四分間の映画をつくった。「反日」のメンバーが活動していた頃、彼らは、帝国―植民地論の視点から、かつての植民地・韓国の民衆への熱い思いを抱いていた。だが、軍政下に喘ぐ韓国民衆からの応答は期待すべくもなかった。その韓国で軍政が打倒されて三五年有余、激しい変貌を遂げつつある彼方から、こんな映画が届く時代になった。

人間の歴史には、逆流もあれば後退もある。あるべき未来に向かって、ひたすら前進の歩みばかりがあるわけではない。しかし、過去の歴史にある過ちや不十分さを克服しようとする営みが、歳月の流れの中には確実にあることへの信頼感をもって生きたい。

追記:『狼をさがして』に関する情報は以下へ→

<http://eajaf.com/>

2月1日

2月1日、2月28日

【2月1日】

天皇誕生日行事◆宮内庁が、新型コロナウィルス禍を受け、23日の天皇誕生日に例年皇居で行われる行事のうち、三権の長や国会議員らが集う祝宴「宴会の儀」や、駐日外国大使らを招く「茶会の儀」を実施しないことを発表。「祝賀の儀」は実施予定で、茶会がない代わりに、外交団長1人が加わるが、同庁は既に、当日の一般参賀を行わないことも決めていると報道。

英女王◆1月31日付英日曜紙サンデー・タイムズが、エリザベス英女王が6月に英南西部コーンウォールで開かれる予定の先進7カ国首脳会議（G7サミット）に先立ち、バイデン米大統領を含むG7首脳らをロンドンにあるバックingham宮殿に招待する意向だと伝える。

【内奏】◆菅義偉首相が皇居で「内奏」。

副大臣認証式◆政府が、丹羽秀樹・文部科学副大臣の認証式を皇居で行う。菅義偉首相が同席。

【2月1日】

宗像大社◆世界文化遺産「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群」を構成する宗像大社（福岡県宗像市）が、辺津宮本殿を囲む末社修復のため仮の住まいに移していた「ご神体」を社に戻す祭儀「宗像大社損社・末社本殿遷座祭」を開く。

【2月3日】

英女王工学賞◆優れた技術者を表彰する英国の「エリザベス女王工学賞」が発表され、青色発光ダイオード（LED）の開発・実用化に貢献したとして、名城大終身教授の赤崎勇、米カリフォルニア大教授の中村修二ら5人が選ばれる。イベントに参加した中村が、英女王は誰も知っている存在だとし「私の人生において最も名誉ある、最も重要な賞だ」。

東日本大震災追悼式◆岩手県大槌町の平野公三町長が定例記者会見で、東日本大震災の発生から10年となる3月11日に町主催の追悼式典を規模を縮小して開催する意向を明らかに。

森喜朗妄言◆東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長が、日本オリンピック委員会（JOC）の臨時評議員会に出席し、JOCが女性理事を増やしていく方針を掲げていることに関連して「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる」「女性っていうのは競争意識が強い。誰か一人が手を挙げて言われると、自分も言わないといけないと思うんでしょうね。みんな発言される」。

【2月4日】

愛知知事リコール運動◆愛知県の大村秀章知事のリコール（解職請求）運動で選挙管理委員会に提出された署名に不正の疑い多数見つかった問題を巡り、運動を主導した美容外科「高須クリニック」

の高須克弥院長が愛知県庁で記者会見し、不正への関与を否定。提出された約43万5千人分の署名の83・2%に不正が疑われるとした県選管調査結果に関し「選管があら探しをした結果だ」「私が不正の指示や黙認をしたことはない」。

【2月5日】

竹田恒泰◆明治天皇の玄孫で作家の竹田恒泰がツイッター上に「差別主義者」などと投稿され名誉を傷つけられたとして、戦史研究家山崎雅弘に550万円の損害賠償や投稿削除を求めた訴訟の判決で、東京地裁が、投稿は「意見や論評で違法性はない」として竹田の請求を棄却。

【2月6日】

東日本大震災追悼式◆達増拓也・岩手県知事が記者会見で、東日本大震災10年となる3月11日、敷地内に復興の象徴「奇跡の一本松」がある同県陸前高田市の高田松原津波復興祈念公園で、県と市の合同追悼式を開催すると発表。

【2月10日】

徳仁、雅子◆東日本大震災の発生から10年を迎える岩手、宮城、福島県の3県をオンラインでそれぞれ結び、被災者を見舞う方向で調整が進んでいることが、宮内庁関係者への取材で分かる。3月11日に政府主催の追悼式があれば、出席する方針と報道。

2・11◆菅義偉首相が、「建国記念の日」の11日を前に「先人の努力に感謝し、さらなる日本の繁栄を希求する機会となることを希望する」とのメッセージを発表。安倍晋三・前首相が2014年から7年

連続で「建国記念の日」に合わせたメッセージを発表しており、菅首相も保守層にアピールする姿勢を引き継ぐ格好となったと報道。

【2月12日】

徳仁、雅子◆赤坂御所で、「国連水と衛生に関する諮問委員会」の活動満了から5周年を記念した元委員らによるオンラインの国際会合に出席。

英王室◆ヘンリー英王子の妻メーガンが、自身の父親に宛てた私信を報じたのは不当として英大衆紙側に損害賠償などを求めた訴訟で、英高等法院が、個人情報むやみに暴露してプライバシーを侵したと認定し、報道は違法だとする判決を言い渡す。

森喜朗◆東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長が、理事会と評議員会の合同懇談会に出席し、女性蔑視発言の責任を取り、辞任を表明。

【2月15日】

徳仁、雅子◆宮内庁が、東日本大震災から10年を迎える福島県をオンラインで結び、徳仁、雅子が被災者を見舞う行事を当面見合わせると発表。宮内庁によると、当初は16日の予定だったが、13日に宮城、福島両県で震度6強を観測した地震を受け、2人が地震被害や余震を心配し、県などが災害対策に専念できるよう見合わせを決めたと報道。

アルゼンチン元大統領死去◆菅義偉首相が、弔意を伝える書簡をフェルナンデス大統領に送る。1997年に明仁、美智子がアルゼンチンを訪問した際に「温か

く迎えていただいた」と謝意を示したと報道。

皇室贈答品◆福井県坂井市の魚問屋で、県特産の冬の味覚「越前ガニ」を天皇、皇后や皇族に贈るため、釜ゆでにする作業が行われる。

美浜原発◆福井県美浜町の戸嶋秀樹町長が、運転開始から40年を超えた関西電力美浜原発3号機（同町）の再稼働に同意。資源エネルギー庁の保坂伸長官や杉本達治知事に報告。

【2月17日】

英王室◆英王室が、エリザベス女王の夫フィリップが16日にロンドンの病院に入院したと発表。詳しい病名は不明、「予防的措施」で経過観察と静養のため病院に数日間とどまると、英メディアが報じる。

【2月18日】

「内奏」◆菅義偉首相が、皇居で「内奏」。閣僚認証式◆菅義偉首相が、皇居で行われた丸川珠代・五輪相の閣僚認証式に出席。

高級公用車◆山口県が前年8月、公用車としてトヨタ自動車の最高級セダン「センチュリー」を購入したのは財源不足が続く中での違法な公金の支出だとして、元県職員が、村岡嗣政知事に対し、購入費2090万円を県に賠償するよう求める住民訴訟を山口地裁に起こす。県によると、県は公用車としてセンチュリー3台を保有していたが、老朽化や経費削減のためうち2台をトヨタの販売店に下取りに出し、前年8月上旬、皇族など「来賓」の送迎用として新たに1台を購入。訴状

によると、新型コロナウイルスの感染拡大で県民への支援が求められる中、安価な車両の選定やレンタルも可能だったのに「貴賓車」としてセンチュリーを購入し、裁量権の逸脱で、県に損害を与えたとしていると報道。

「日の君」処分◆東京都立学校の卒業式で君が代斉唱時に起立せず、停職6カ月の懲戒処分を受けた元教諭の女性2人が都を相手取り、処分の取り消しと計600万円の賠償を求めた訴訟で、最高裁第2小法廷（三浦守・裁判長）が17日

付で双方の上告を退ける決定をし、2人の処分を取り消し、賠償請求は棄却した。二審東京高裁判決が確定したと報道。

【2月19日】

皇宮警察官◆皇宮警察が、職務上の立場を利用して知人女性を赤坂御用地に出入りさせたなどとして、京都護衛署長の皇宮警視正を減給1000分の10（6カ月）の懲戒処分にしたと発表。警視正が退職。

【2月22日】

天皇誕生日祝賀会◆外務省が、東京都内で例年開催している天皇誕生日祝賀レセプションの開催を見送ると明らかに。前年中止しており2年連続。各国と共に祝賀の意を表すためとして、23日に茂木敏充外相と、外交団長を務める駐日サンマリノ大使の祝賀メッセージを外務省ウェブサイトに掲載すると報道。

天皇誕生日◆プリンケン米国務長官が、23日の天皇誕生日に合わせた声明で、祝意を示した上で「バイデン大統領や私は大切なパートナーシップを深め、拡大し

続けるために日本訪問を切望している」。国務省が発表。

【2月23日】

徳仁◆61歳の誕生日。これに先立ち住ましいの赤坂御所で記者会見し、新型コロナウイルス禍の克服を願ひ「忍耐強く乗り越える先に、明るい将来が開けることを心待ちにしております」と述べたと報道。発生から10年を迎える東日本大震災について「今思い出しても胸が痛みます。被災地に永く心を寄せていきたい」。眞子の結婚について「秋篠宮が言ったように、多くの人が納得し喜んでくれる状況になることを願っております。皇室と「国民」

との交流が困難になったとして、前年秋からオンラインの活用を開始したことについて「新たな可能性を見いだせたことは、大きな発見。引き続き、状況に応じた形で活用していきたい」。秋篠宮、紀子や菅義偉首相らが皇居宮殿「松の間」で、祝意を伝える行事が行われる。午前に皇族を代表して、秋篠宮、紀子が徳仁にあいさつ。「天皇誕生日祝賀の儀」で菅首相ら三権の長と外交団長が祝意を伝える。行事は例年より規模を大幅に縮小し、皇居での一般参賀は前年に続いてとりやめたと報道。

【2月24日】

孔子廟◆儒教の祖、孔子を祭る孔子廟のために那覇市が公有地を無償提供したことが、憲法の政教分離の原則に違反するかどうかが争われた住民訴訟の上告審判決で、最高裁大法廷（裁判長・大谷直人長官）が「一般人から見ても、市が特定の

宗教を援助していると評価されてもやむを得ない」として違憲と判断。施設を所有する一般社団法人「久米崇聖会」と市の訴えを退け、使用料の全額免除は違法と結論付ける。判決によると、14世紀に中国から渡来した職能集団「久米三十六姓」の子孫でつくる同会が2013年、市の許可を得て中心部の松山公園に「久米至聖廟」を建設し、住民の女性が提訴したと報道。

【2月26日】

皇位継承策◆政府が国会から速やかな検討を求められている安定的な皇位継承策を巡り、3月末までに本格的な検討を開始する方向で調整に入ったと、政府関係者が26日、明らかに。有識者会議の設置が念頭にあるとみられると報道。官邸筋が「3月末までに議論を始めないと21年度内に取りまとめができない」と説明し、21年度予算案の衆院通過後にも会議を設置し、検討を始めたといふ意向を示す。加藤勝信・官房長官が衆院予算委員会分科会で、旧宮家（旧皇族）の男系男子子孫への皇籍復帰に関する意思確認は「現時点で考えていない」と述べる。

英王子◆英王室の「公務」から引退したヘンリー英王子が米国のトーク番組組に出演、王子一家を巡る英メディアの過熱報道が「有害」で、自身の心の健康が「破壊」されていったため公務を退く決意をしたと語ったと、英メディアが伝える。

【2月28日】

2・28事件◆台湾で1947年に当時の国民党政権が台湾人の抵抗運動を弾圧し

住民を殺傷した「2・28事件」から74年になり、南部・高雄市で犠牲者追悼式典が開催され、蔡英文総統「民主主義と自

由は台湾の持続的発展を可能にする鍵だ」。

反ロックダウン◆アイルランドの首都ダ

美空ひばり「昭和」

「紀元節」と「天皇誕生日奉祝」に反対する連続行動 報告

.....

二月一日(木)、反「紀元節」デモ。九〇名を超える参加者とともに早稲田のキリスト教会館で簡単なデモ前集会を行った。3・1東京集会(2・27)・新宿キャンドルアクション(3・1)、おことわりリンク、即位大嘗祭違憲訴訟、アクティブ・ミュージアム(wam)の四団体からアピールをもらい、「なくせ!建国記念の日・許すな!靖国国営化 2・11東京集会」からの連帯アピールと集会宣言を読み上げてデモ出発。アピールではいずれも深刻な課題が提起された。

デモは高田馬場駅付近の戸山公園の手前で解散。警察による規制線が張られていたため、右翼の騒音は集会会場には響かなかつたものの、コース要所の交差点には街宣車が待ち構え、機動隊に取り押さえられたり、日の丸を振りながら執拗につけてくる右翼も少なくなかった。やや肌寒く感じたが、われわれの熱気はそれを上回った。

二月三日(火)、文京区民センターで「天皇誕生日」奉祝に反対する集会。八七名の参加があった。「天皇代替わり」とは何であったのか——再定義された象徴天皇制」と題して、天野恵一、桜井大子、北野誓の三人の発題のあと、集会参加者との討論を行なった。

近代以降初めての「讓位」により上皇、天皇、そして昨年11・8の「立皇嗣の礼」で、次期天皇の座についた秋篠宮による、権力の三つ巴状況を指摘し、宮内庁発表の新年の天皇家写真の変遷から、傍系に流れる皇位と、女系・女性天皇の可能性を批判。活発で有意義な意見討論が行なわれた。最後に「3・11を反天皇制・反原発の日に!」集会、「やめろ敵基地攻撃大軍拡」3・27集会、おことわりリンクからのアピール。

神武天皇の即位日とされる2・11と、徳仁の誕生日である2・23の近接は、否応なく「万世一系」を想起させ、「国民」に祝賀を強制する。これからも共に声を上げ続けよう。(黒薔薇アリザ)

wamセミナー 天皇制を考える (第二回・第三回)

.....

二〇二二年二月一日、二三日に

プリンで、新型コロナウイルス対策の都市封鎖に抗議するデモが行われる。デモ参加者と警察官らともみ合いになり、当

「wamセミナー 天皇制を考える」第

二回・第三回を開催した。このセミナーは、「紀元節」と天皇の誕生日の

四日間を「祝わない」という意思表示

のためにwamを開館し、天皇制を維

持してきた日本に暮らす一人ひとりの

責任を見つめなおし、議論する場を作

ろうと昨年の二月三日からスタート

した。

一日は「桜の国の悲しみ、菊の国

への抗い——『紀元節』に伝えておき

たいこと」と題して石川逸子さんにお

話を伺った。「皇国民教育」の刷り込

みで「神国」「聖戦」を信じていた子

ども時代から、敗戦を経て途端に「鬼

畜」が「民主主義」に変わった衝撃

や、個人誌の「ヒロシマ・ナガサキ」

を発行するなかで朝鮮人被爆者と出会

い、日本の加害について学び伝えるよ

うになったこと。そして、朝鮮から文

化を学んでいた日本が、なぜ侵略戦争

をしたのかという問いを辿って、テロ

殺人と陰謀、武力で事を運んできた明

治以来の歴史に行きついたという石川

さんの人生を語ってくれた。話の合間

に折々の石川さんの詩を朗読してくれ

たことで、お話が真に迫って浮かび上

がってきた。

二三日は内野光子さんに「歌会始

.....

局が約20人を逮捕。英メディアなどが伝える。

が強化する天皇制——序列化される文芸・文化」について話してもらった。

かつては歌会始やその選者になること

を痛烈に批判していた前衛歌人が何の

違和感もなく選者や御用掛になっ

ていく歌壇の状況と、「昭和」「平成」と

天皇の短歌が「平和への願い」や「戦争

への思い」としてメディアに繰り返し

露出する中で、いわゆるリベラル派が

親天皇制へ傾いていくことへの危惧を

語り、平和、慰霊、福祉、環境などを

テーマに短歌を詠む天皇夫妻が政府の

政策の欠陥を補完し人々の視点をそら

す役割を担っていることを指摘した。

「その考え方は非寛容だ」と言われて

も、思ったことを言い続けることが大

事だとお話を締めくくってくれた。

次回セミナーは四月二十九日に開催の

予定である。(山下芙美子/wam)

「日の丸・君が代」の強制を跳ね返す! 神奈川集会とデモ

.....

「コロナ禍下であるうと、いやコロナ禍下だからこそ、不当に制限されがちな権利を主張し声をあげていこう」との主催者挨拶後、ワクチン承認用の臨床実験問題に「はまって」しまったという講師の小倉利丸さんは「日本人」

に拘る「ワクチン・ナシヨナリズム」について次のように語った。「海外で開発された医薬品の日本での承認規制は一九八五年に始まり、九二年には民族的要因の科学的評価の導入を米やEUにも認めさせ、九八年のその緩和版「日本人」への影響を判断するために「国内実施の臨床試験資料を併せて提出」と規定」が、今回一二月の承認遅延に繋がる。二〇一八年には国際共同治験そのものが、医学薬学分野での民族的要因（遺伝的・環境的）の実体化を前提とした枠組みとなり、日米欧でナシヨナリズムと科学的研究がリンクした。今日本では、科学的合理性を装った製薬資本による市場争奪戦とそこを勝ち抜くための日本民族特殊性論を「常識」的前提とさせられる科学的研究構造によって人々の生存・健康の権利が挟み撃ちにあっている」と。ワクチンに関する質疑の後、教科書、日米軍事一体化、政教分離、コロナが許す理不尽、オリンピック等についてのアピールが続く。集会宣言後、デモ出発。開会前からデモ終了後まで、酷い右翼街宣による妨害・警備不備に見舞われ、多くの参加者が不愉快・危険な思いをしたので、先日神奈川県警と公安委員会へ抗議に出向き、要望書も送付しその結果を待っている。

「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会／大友深雪

孫基禎（ソン・キジョン）さんは『日本の金メダリストか！？』……

静岡では昨年の①2・23集会（天野恵一さん、②4・29集会（鵜飼哲さん）と一貫して反オリンピックをテーマに集会を打ってきた。今回はその第3弾である。

去る二月一四日（日）、静岡市内で一足早い「『天皇誕生日』を考える」集会がおこなわれた。以下は、植民地教育の専門家・佐野通夫さんの講演のあらましである。

一九二六年のベルリンオリンピックにおいて、植民地朝鮮出身のソン・キジョンさんは宗主国日本の差別的扱いに打ち克って目覚ましい記録で代表権を獲得、ベルリンの本大会で見事優勝を果たした。表彰台の彼は栄冠の月桂樹で胸の「日の丸」を隠し、東亜日報はそれをそのまま新聞に載せた。五輪史上有名な「消えた『日の丸』事件」である。新聞は弾圧され、ソンさんは「再び陸上をやらなさい」ことを誓わされるが、この抵抗の精神はメキシコ五輪の陸上200m表彰台での黒人選手たちの抗議行動などを経て、現代のブラック・ライヴズ・マター運動へと脈々と受け継がれている。

戦後、韓国政府はソンさんの国籍を韓国に戻すよう何度も要求するが、JOCは未だこれを拒否し続けている。東京オリンピックに買われる天皇制国

2016 → 2020「代替わり」反対行動の記録 『終わりにしよう天皇制』

このかんの「おわてんねっと」の行動の記録が、ようやく報告集となりました。

おわてんネットは解散しましたが、ウェブとメールアドレスは、まだ持続しています。「終わりにしよう天皇制！」の声も、活動に携わってきた人びとの営為も、もちろんたった今もなおさまざまなかたちで継続中です。

反天皇制運動の今後の活動に、引き続きご注目ください。そのための一助として、この記録集が活用していただけることを、心から願っています。出版事情が厳しい折ですので、かんたんに手に取っていただけないのが残念ですが、身近な方からのご入手が困難でしたら、800円プラス送料180円（A5判208ページ）で、頒布いたします。下記にご連絡くださいませ。



編集・発行＊おわてんねっと

（終わりにしよう天皇制！「代替わり」に反対するネットワーク）

<http://han.ten-no.net> mail: owaten@han.ten-no.net

家の「植民地主義」は未だ克服されることなく、軍隊慰安婦問題や徴用工問題等に如実に表れている。講演では在日の子どもの幼保・高校無償化除外等の教育差別についても詳細な解説があったが、紙面の都合で省略させていただきます。くわしくは、アラート№55の佐野さんの文章を参照されたい。

(天皇制を考える会・静岡／山河進)

「私たちに王はいらない」！ タイの場合、日本の場合 報告

タイで王室批判が起きているとのニュースが流れたのは去年の夏だ。おもしろそうだし集会で、と考えたが話せる人を見つけれず、結局三度続け

て自分たちが話をすることにした。

報告は二つ、藤田康元による「タイの民主化運動の歴史を学ぶ」と加藤の「不敬罪 タイの場合、日本の場合」である。二人ともタイに詳しい訳ではないので一から調べている。前者は三年の立憲革命以降のクーデターと民主化の繰り返しと去年からの王室批判を、後者は不敬罪に絞って報告した。

タイは軍事政権と民主派の対立を前国王が調停する歴史が続いていた。しかし現国王は醜聞まみれで人望がなく、その上有望な民主化政党が憲法裁判所により解党され、長い間表に出てこなかった学生層を中心に怒りが爆発、その結果、一言批判しただけで三年から一五年の禁固刑を実際に適用し

ている不敬罪があるのに王室批判が公然化する事態となった。まだ王制ではなく王室批判の段階だが、この先どうなるのか目が離せない。今世紀に入ってからでも流血は起きている。今回の王室批判にも不敬罪は適用されだした。タイに民主主義は根付くのか？そして王制はどうなるのか？参加者との間の議論は尽きなかった。もちろん他国の問題ではない。政権交代のほとんどないこの国に民主主義が根付いていると言えるのか？そして天皇制は？コロナ状況下でもタイに限らず世界中で、自由と平等を求める運動は街頭で続いている。希望は街頭にある。これからも、天皇制がなくなるまで私たちは戦い続ける。

二月一四日つくば市の吾妻交流センター大会議室、参加は八名。
(戦時下の現在を考える講座／加藤匡通)

日々天日誌

2月8日(月) ● 警視庁機動隊の沖縄への派遣は違法住民訴訟控訴審第二回口頭弁論

2月10日(水) ● 即位大嘗祭違憲訴訟(差し止め差戻審) 第四回口頭弁論

2月11日(木・休) ● 桜の国の悲しみ、菊の国への抗い(集会の真相参照)

● 反「紀元節」デモ(集会の真相参照)

2月13日(土) ～ 2月19日(金) ● 第10回死刑映画週間「差別と分断」のなかの死刑制度

【学習会報告】

黒田久太『天皇家の財産』(三一書房、一九六六年)

近代天皇制の経済的面については、研究文献の少なさもあって、私たちは知っているようで知らないことも多い。本書は古い本だが、当時調べられるだけの資料に当たり、事実追跡を主眼にしたと著者が言うだけに、今日でもずいぶん役に立つ本だ。明治国家指導層が憲法制定に当たって、国家の根幹への議会の関与を極力せよめる意図から国家財産のある部分に皇

室財産の形をとらせて不可侵化させ、元来私的資産をほとんど持たない皇室を巨大な「財産家」たらしめたこと、この皇室財産が株式・国債の運用益と広大な山林経営の収益によって一九四五年まで抜け目なく蓄積され続けたこと、が本書からよくわかる。

報告は戦前に関する記述の紹介を主とし、戦後憲法下の皇室経済については私たちも従来比較的よく知っているから簡略になされた。しかし戦前と戦後では状況は一変しているが、いくつかの本質的な面で継承性があることは討論でも問題になった。皇室財産はほとんど固有財産に移されたが、国から皇室への供与・貸与(と言っておく。皇居など)に對して、膨大な公的行爲にかかわる経費をも含めて、国会(人民)の関与は微弱であること、戦前の皇室財産は国家が自分の目的から設定したもので、その収支に皇室自身の恣意性が働く余地が狭かったが、それは戦後も続いていて、与えられた経済

生活の埒をあまり自身で越えようとしない(他国王室に比べて「自由度」が小さい)らしいことなど。
本書は戦後天皇制が権力と自立的経済力を失ったことで形骸化の方向に進むと見ているようだが、この点は私たちは賛成できない。戦後天皇は支配集団の一体性の柱、国民意識安定の支えとして、こんにちも重要な政治的存在でありつづけているのだ。

次回は小菅信子『日本赤十字社と皇室』(吉川弘文館)を読む。

(伊藤晃)

集合情報 INFORMATION

2月14日(日) ●「日の丸・君が代」の強制を跳ね返す！神奈川集会所デモ(集会の真相参照)

●天皇制とオリンピックく消えた「日の丸」事件(集会の真相参照)

●私たちに王はいらない！ タイの場合、日本の場合(集会の真相参照)

2月20日(土) ●中止一択！東京五輪 JOC前抗議行動

2月23日(火・休) ●「天皇代替わり」とは何であったか(集会の真相参照)

●「歌会始」が強化する天皇制(集会の真相参照)

開催中 12月4日(土) ●天皇の戦争責任・忘却に抗する声々女性国際戦犯法廷から20年

13時〜18時(月・火・休日休館) / w a m 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催: 同館

3月6日(土) ●中止一択！東京五輪 JOC前アクション&デモ

14時〜15時デモ出発/日本オリンピックコミュニアム(JOC)前(地下鉄外苑前駅ほか) / 共催: 反五輪の会

「オリンピック災害」おことわり連絡会(080-5052-0270)

3月7日(日) ●どうしてやめないの？

東京五輪 問い直そう！オリンピック・パラリンピック練馬の集い

13時30分開場/谷口源太郎/生涯学習センターホール(西武池袋線練馬駅は

か) / 主催: 練馬・文化の会&東京オリンピック・パラリンピックを問う・練馬の会(連絡先: 090-5208-5803 池田)

3月8日(月) ●即位大嘗祭違憲訴訟(差し止め差戻審) 第5回口頭弁論

10時開廷/東京地裁・709号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

3月9日(火) 5月5日(水) ●貝原浩「風しもの村」原画展

9時30分〜17時/福原記念美術館(北海道河東郡鹿追町: <http://art-fukuhara.jp/>)

3月11日(木) ●3・11天皇出席の追悼式典・一斉黙祷反対 被災者・被災地切り捨ての10年を許さない

12時〜/天野恵一/千代田区図書文化館4F(地下鉄霞ヶ関駅ほか) / 主催: 3・11行動実行委員会(連絡先: fax: 03-3446-9058)

3月12日(金) ●オンライン市民講座 梨の木ピースアカデミー「天野恵一の語り継ぐ反天皇制(経緯史)」第1回

*以下、隔週金曜日・全9回 19時〜/天野恵一/要事前予約/連絡先: peaceacademy@ashinoki-sha.com

3月14日(日) ●NOーデジタル庁市民集会

13時30分〜/文京シビックセンター4Fホール(地下鉄後楽園駅ほか) / 主催: NOーデジタル庁(連絡先: 宮崎 080-5052-0270)

●コロナ禍の差別・分断 ヘイトを打ち破ろう！

14時集合・15時デモ出発/新宿アルタ前広場(JR新宿駅ほか) / 主催: 差別・排外主義に反対する連絡会(itelnyo@gmail.com)

3月27日(土) ●「狼をさがして」シアター イメージフォーラムほか(JRほか渋谷駅) / 連絡先: 同館(03-5766-0114)

●やめろ！敵地攻撃大軍拡 馬毛島に軍事基地をつくるな！集会&防衛省デモ

「集会」 14時15分開場/三宅公人/文京シビックセンター4Fホール(地下鉄後楽園駅ほか) / 「デモ」 17時30分集合・18時デモ出発/外濠公園(JRほか市ヶ谷駅) / 主催: 大軍拡と基地強化にNOーアクション2020(連絡先: 03-3961-0212ほか)

4月3日(土) ●三里塚に生きる 石井紀子さん追悼の集い

12時30分開場/文京区民センター2A(地下鉄春日駅ほか) / 主催: 同実行委(連絡先: 03-3372-9408)

●救援連絡センター定期総会

13時開場/水戸喜世子/文京区民センター3A(地下鉄春日駅ほか) / 主催: 同センター(03-3591-1301)

4月7日(水) ●原発被ばく労災賠償請求裁判第17回口頭弁論

14時開廷/東京地裁103号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

4月11日(日) ●反天皇制労働者連続講

座第3回「天皇制と沖縄」

13時30分〜/南部労政会館(JR大崎駅ほか) / 大仲尊/主催: 反戦反天皇制労働者ネットワーク・関東(03-3446-9058)

4月14日(月) ●即位大嘗祭違憲訴訟(国賠請求分) 第7回口頭弁論

14時30分開廷/東京地裁103号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

4月18日(日) ●新型コロナ災害下の自衛隊とワクチン問題を考える集会

13時15分開場/滝野川西区民センター8F(地下鉄西巣鴨駅ほか) / 木元茂夫、天笠啓祐/主催: 東京都総合防災訓練に反対する実行委員会2020(03-3961-0212)

*会場等の理由により中止・延期の可能性あり。主催者への確認を。

●今号もできた。よかった。通常号はこれが最終か。お疲れさまでした。(木寛)

●編集長は特別号を構想しているようです。支え伴走してくれたあなたに依頼が！(蝙蝠)

Q...神田川

●泊りこまないといけない手書きの時代から今まで。まあよくやった(狼)

●始まりがあれば終わりが来る。終わりがあれば始まりがある。しばしさらば(羊)

●40年以上書き続けた作業の終わり、感傷的になるが、よく持続できたという気持ちもある(病気のままの熊)

●ええ〜 終わりのい〜(貂)